

教室と社会がつながれば 学習意欲は向上する

文部科学省／国立教育政策研究所
長田 徹氏

おさだ・とある●石巻市立雄勝中学校社会科教諭、仙台市教育委員会指導主事などを経て、2011年5月から文部科学省、現在、初等中等教育局 教育課程 教科調査官、同児童生徒課 生徒指導調査官。国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター 総括研究官、同教育課程研究センター 教育課程調査官。



学ぶことと働くことをつなげることがキャリア教育だとすれば、学校現場で大半を過ごす教員にできることは何か。「キャリア教育は特別な活動ではなく、日常の授業で育まれるべきもの」と語る国立教育政策研究所の長田 徹氏に、自らの中学校教員経験や、各種調査結果も交え、教科において大切なキャリア教育の視点について語っていただきました。また、高校の教科学習を通して培った力は、社会人になったときにどう生きるのか、小社ワークス研究所研究員による最新の調査データもあわせて紹介します。

取材・文／堀水潤一(P8~11)、松井大助(P12) 撮影／中岡邦夫

学校と社会が

教室の中で

結びついているか

宮城県石巻市の中学校で社会科の教員をしていた当時、私は「自分の授業は将来、必ず生きてくる。決して高校に合格させる

ことが目的ではない」

という信念をもって

指導をしていたつもりです。年に数回は

そうした気持ちで直

接生徒に語っていました。

た。けれど、今考えると数回だけな

のです。公立の中学校には授業に

集中できない生徒も大勢います。そ

のため、何とか関心を引きつけよう

と、「ここは次のテストに出すぞ。入

学試験でも出るぞ」と、ニンジンをお

らさげるかのような発言もしていま

した。そうした言葉を繰り返して浴び

た生徒には、「授業は試験のためにす

るもの」と誤った価値観が刷り込ま

れたかもしれません。学習は、自分の

将来につながるからするのだという

ことを、もっときちんと示すべきであ

ったと反省しています。

もうひとつ、自戒を込めて自分の

キャリアについて話したいと思います。

今でこそ国立教育政策研究所の総

括研究官としてキャリア教育や地域

連携の重要性を訴える立場にあり

ますが、中学校の現場にいたときは、

そうしたことに対する知識も関心もありませんでした。それどころか、キャリア教育という言葉が使われ始めたころ、当時の校長から「キャリア教育を勉強しておきなさい」「5日間の職場体験学習ができないか」と言

われたときなどは、「これだけ生徒指導が大変なのに職場体験学習など無理だ」「地域との連携なんて簡単に

いくわけない」と思っていたほどです。

しかし、困難を経て実現にこぎつ

けた職場体験学習で、私はその効果を

実感することになりました。子ども

たちが生き生きと活動したばかりか、その後の授業に取り組む姿勢

も変わってきたのです。私は、キャリア

教育は学力向上にも結びつくとい

う感触を得ました。後に、仙台市教

育委員会在籍時、3日間以上の職場

体験学習を経験した中学生に行った

アンケートでも、「この体験を通じて

これからもっと身につけなくてはな

らないと感じた力は？」という問いに

対し「教科の学力」という回答が上

位にあがり、私の感覚は数値で裏付

けられた形になりました。

職場体験学習は、私自身にも影響

を与えました。それまで名刺をもつ

たことも、アポイントをとって企業に

訪問した経験もありませんでした

が、民間の方とかかわるなか、したいに社会の仕組みを知り、世の中で求められる力などを理解していったほか、地域のもつ教育力を実感しました。

示しています。同調査によると「キャリア教育計画の充実度が高い」学校ほど、児童・生徒の学習全般に対する意欲の向上が認められる傾向にある

ことがわかります。高校の

場合は特に顕著で、例えば

普通科では「社会人などの

参画・協力を得ている」学校の

約78%が、専門学科では

「教員はキャリア教育に関

して理解し協力している」

学校の約80%が、総合学科では「教

員はキャリア教育に関する情報を収

集し活用している」学校の約72%が、

それぞれ「学習意欲の向上あり」と

回答しています。

また、同調査ではこんな興味深い

回答もありました。「自分の将来の

生き方や進路について考えるために、

どのようなことを指導してほしいか

ですか？」という問いに対して「就

職後の離職・失業など、将来起こり

得る人生上の諸リスクへの対応」と

回答した割合が中学生で約32%、高

校生で約23%と比較的上位にあがっ

たのです。同様に、保護者の過半数

も、将来のリスクへの対応についての

指導を望んでいることが明らかにな

りました。ともすれば私たちは、生

徒や保護者が目先の出口のことばか

学ぶことと実社会が 結びついている子は、 学習意欲が高い

そのようなことに気づいた矢先、何

の運命か、仙台市教育委員会でキャ

リア教育・学力向上担当の指導主事

となり、仙台版キャリア教育といえる

「仙台自分づくり教育」を推進する

ことになりました。そして現在は文

部科学省・国立教育政策研究所に籍

を置いています。そうした過程で行っ

た数々の調査を通じてわかったこと

があります。それは、なぜ学ぶのが

はつきりしている子や、今学んでいる

ことが将来役立つと思っっている子、教

室での学びと実社会とが結びついて

いる子ほど、内発的な学習意欲が高

いということでした。

2012年に国立教育政策研究

所が実施した「キャリア教育進路指

導に関する総合的実態調査」も、キ

ャリア教育が学習意欲を促すことを

●内発的な学習意欲が高い児童・生徒の学ぶことに関する意識

なぜ学ぶのかがはっきりしている

今学んでいることが将来役立つと思っている

教室での学びと実社会が結びついている

●教科におけるキャリア教育の視点

1. 学習の内容

教科で学ぶ内容が実際に活用される場面を伝える

2. 指導の手法

指導を通じて、社会で必要とされる能力を培う

3. 学習のルール

時間を守るなど実社会で求められる態度を身につける

4. 体験学習

1から3を通じて学んだことを実践で確認する

教科における キャリア教育で大切な 4つの視点

では、学習と社会とがつながっていることを、どう子どもたちに伝えて

り考えていると思いがちですが、実は長期的な視野にたった進路指導を求めているのです。

進学や就職という近い目標を応援することはもちろん、卒業後、社会人として生きるといふ遠いゴールを見越して支援することが、教員の仕事であることを忘れてはいけません。

いくべきでしょうか。私の場合、職場

体験学習の効果を目的にしたりした

ことがキャリア教育を志向するきっかけ

になったとお伝えしました。ただ、

今は、体験ありきのキャリア教育

は見直さなければならぬとも考えて

います。体験を伴う学習が有効な

の言うまでもありませんが、体験

をしなければ教育活動ができないわ

けではありません。そもそもキャリ

ア教育が生き方・あり方を考える教

育であるならば、行事やイベントを通

じてしか実行できないのでは困りま

す。部活動や生活指導を含め、学校

生活全般において行つて然るべきで

す。そして、学校生活の代表が教科

の授業であり、私は、教科におけるキャリア教育には4つの視点が大切だと考えています。

1つめは「学習の内容」。その教科で学ぶ内容が実社会で活用される場面を伝えることです。単元のなかには、仕事や実生活で使える内容がたくさんあります。例えば、理科の「反射」や「図形の角度」。これを自動車におけるバックミラーの死角と絡めて説明したら理解が深まるかもしれません。また、これはある学校の数学の授業で行われていた例ですが、パスタメジャー（直径が異なる複数の穴にパスタを通し人数分の量をはかる調理器具）を自作することで、「比」について学ぶことだって可能です。

数学を身近に感じられるようになるでしょう。さらに、社会科であれば、正規・非正規雇用の違いについて具体的なデータをだしながら考えさせることで、進路を選択する際のヒントになるはずで

す。このように学習の内容を、働くこと、生きることにつなげるという視点が大切です。とはいえ、バックミラーやパスタメジャーの話毎回すべての授業でしようと思うと無理も生じます。何もシャワーのようにキャリア教育的な要素を浴びせかける必要は

ありません。1カ月に数回、「ここだ」という場面でいいのです。特に高校の先生は得意分野があるでしょうから、そのときこそチャンス。「自分はこういう研究や活動をしてきて、これだけは言える」「これって大人になったときに役立つからな」と語ってください。それこそ先生方のキャリアが生きてくる瞬間です。

2つめは「指導の手法」。教科を学ぶことで培われる能力を、社会で必要とされる力と絡めて伝えるという視点です。例えば、人前で自分の気持ちを表現することがうまくない子は、大勢いますが、それは社会では必須といえる能力です。ならば、ペア学習を多用するとか、発表の機会を常設するなどの指導を通じて、その力を育てるよう意識するべきです。これはどの教科の時間であっても可能だと思

います。3つめは「学習のルール」。時間を守る、身だしなみを整える、名前を呼ばれたら返事をするといった、実社会で必要とされる態度を身につけるといふ視点です。これは理解しやすいでしょう。ただ、ここで気をつけたいのは、あくまで社会に出たときに必要だから身につけさせるのであって、「学校のルールだから守れ」と抑



え込んではいけません。それでは、「卒業式まで我慢すればいいや」で終わってしまう恐れがあります。そして4つめにくるのがインターンシップなどの「体験学習」。すなわち学習の内容や手法やルールを通じて学んだことが、実際に社会で使えるかどうかを確認することです。練習を積んである程度力を身につけたら試合で試したくなるのと同じこと。それによって「普段、先生が言っていることと同じことを社長が言っていた」

「今まで学んできたことは、社会に出たときに役立つのだな」という気づきとなり、学習に取り組む姿勢へとつながっていくと思います。1〜3という基盤があつての4ですが、逆のパターンがあつても構いません。私のケースがそうでしたが、最初に体験から始まって、そこで得た気づきを授業に生かすこともあるはずですが、ただしその場合、教員にそうした意識が働いている必要があります。単にイベント的にインターンシッ

プに連れて行き、「楽しかった」「大変だった」という感想で終わったのであれば効果は半減です。きちんと前後の授業で伝えるからこそ、体験学習は生きてくるはずです。

思いは必ず伝わる それが教育という 仕事のすばらしさ

繰り返しますが、キャリア教育は特別な教育活動ではありません。それぞれの先生方が、今まで築いてこられたキャリアを生かすことから始めればよいのです。何より、「自分は、教科のなかでキャリア教育をしている」と意識することが大切です。そして意識したならば、ぜひ口に出してください。子どもたちが先生に親しみをもつていたとしても所詮は他人。表現をしなければ伝わりません。いっぼうできちんと言われれば必ず伝わります。何年後かに「あの先生が教えてくれたことはやはり大事だった」となるはずですが、

ら改めてそのことを確認できました。例えば、津波に流され電柱にしがみついていた男性に対して、救助が来るまで眠らないよう交代で励まし続けた11人の小学生がいます。「なぜ君たちは最後まで声をかけ続けたの？」と聞くと、「だって担任の先生の口癖が『最後こそ肝心』でしたから」という答えが返ってきました。また、校庭に設置された給水所に長蛇の列ができたとき、お年寄りの代わりに並び、重い水を家まで届けていた高校生がいます。「なぜそこまでしたの？」と尋ねると、「校長先生からいつも『感じたら動け』と言われていましたから、感じたまま行動しただけです」という返事。あれほど困難な場面にあつても、先生方が普段口にかけていることを、子どもたちは実行に移しました。1年間どんなに仕事がつらくても卒業式で「先生ありがとう」と泣かれると、翌年度分のエネルギーが一気にチャージされるように、私は教育者としての一生分のエネルギーをこのときに蓄えた気がします。「教育つてすごい。教師つてすごい仕事だ」と心から感じました。だからこそ同時に、責任の重さもかみしめています。

データ検証ではっきりと見えてきた 将来につながる「教科で培われる力」

生徒たちは授業の中で知識以外に何を学んでいるのか。また、授業での経験は社会人になった時本当に役立つのか。リクルートワークス研究所、辰巳哲子の研究からそのヒントを探ります。

リクルートワークス研究所
主任研究員 辰巳哲子

たつみさとこ ●1992年リクルート入社。社会人向けキャリア支援研修の開発や、高校生・高卒後未就業者のキャリアカウンセリングに携わり、2003年より現職。2009-2011年に中央教育審議会キャリア教育・職業教育作業部会委員も務める。全国各地で教員向け研修会や生徒の変容に関する共同研究を実施。

高校時代の教科の授業から何を獲得したか、それが現在にどうつながったかを社会人に調査

授業で生徒の生きる力を伸ばすのもキャリア教育、という認識が、学校現場に広がってきたのではないかと。明確な意図をもって授業を設計し、事前と事後の生徒の変化をみるという実践研究も増えたようだ。

それでも先生方の中には、授業での創意工夫がどこまで生徒たちの将来につながっているか、まだ見えない部分があると感じている方もいるのではないだろうか。短期の生徒の変化は追えても、社会に出てどうなったか、長期の変化まではなかなか追えないからだ。

その残された疑問に迫ろうとしたのが、リクルートワークス研究所の辰巳の研究だ。1730人の社会人に対して「高校時代の経験から何を学んだか」を調査。さらに、この調査結果をもとに、400人の社会人に「高校の教科学習で知識・技能以外に得たもの」と「社会人になってから使っている力」を別々に尋ね、統計的手法で両者にどんな関連性があるか明らかにした。そこから何が見えてきたのか、ポイントをお伝えしたい。

部活動やイベント、アルバイトよりも 授業のほうが幅広い「内的経験」を獲得していた

研究では、今働いている社会人が、高校時代の「教科学習」「部活動」「文化祭などの学校行事」「アルバイト」の4つの経験からどんな「内的経験」を得てきたかを調査した。内的経験とは、さまざまなできごとを理解・解釈するなかで本人の内側に養われたものだ。例えば「班活動」という他人の目にも見える外的経験を通して、「他者と協力して共通の目標を成し遂げる方法を学んだ」という内的経験も得るといふ具合に。

調査結果によると、社会人にとって、高校時代に獲得した内的経験が最も多岐に渡っていたのは教科学習だった。特に「自信」「継続する習慣」「失敗から学ぶこと」を得たという反

応が多く見られた。日常の授業から、生徒たちが知識以外にも多くのことを学んでいることが実証された形だ。また、教科学習から得た内的経験を整理すると、「集団で取り組む」「セルフマネジメント」「自分の考えをもつ」ことを学んだ、という3要素に分けることができたという。

教科学習から得たさまざまな内的経験が 仕事で活用する力の礎になっていた

次に研究では、「高校の教科学習で得た内的経験」と「社会人になってから使っている力」との結びつきを分析した。

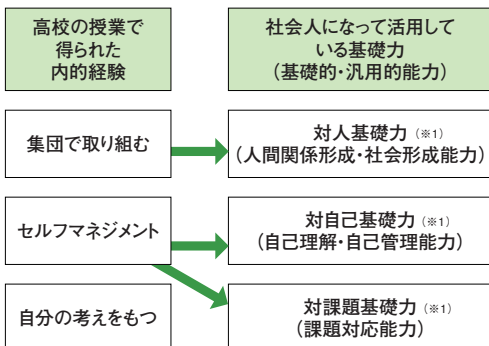
すると、文部科学省が定義した「基礎的・汎用的能力」に沿って言えば、高校時代の授業で「集団で取り組む」ことを学んだ人は、仕事で「人間関係形成・社会形成能力」を多く活用していたという。また、授業で失敗から学ぶことや自分なりのやり方で解決することなど「セルフマネジメント」を習得した人は、仕事で「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」を活用していた(図表1参照)。

このほか、高校時代の教科学習で物事の本質をとらえるなど「自分の考えをもつ」ことをしてきた人は、進学先の専攻分野もおもしろいと感じていることや、社会に出てからの学習時間が長いことも示された。高校の授業を通して学んだことは、進学・就職後もたしかに生きていたのだ。

生徒たちが獲得している内的経験は、 教科によってかなり違う?

研究ではさらに「どの教科でどんな内的経験を得たか」も調査。国語は「自分の意見をもつ」の項目に、数学は「自分なりに解決する」の項目に、英語は「継続する」の項目に高い反応が示されるなど、教科によって獲得している内的経験が異なることも示唆された(図表2参照)。こうした内的経験の枠組みや、内的経験と社会で活用する力の結びつきを、授業のねらいや手法を考える時に先生方にも参考にしていただきたい。

【図表1】教科学習の内的経験と社会人が活用する力の結びつき



(※) 矢印が結びつきの強いところ。内的経験の「自分の考えをもつ」については、「大学時代の学習満足度」「社会人になってからの学習習慣」への影響が確認できた。
(※1) 「基礎力」は辰巳が研究の中で統一して使用している言葉。その後に続く()内に記載した文部科学省の定義した「基礎的・汎用的能力」と合致する。

【図表2】内的経験と主要5教科の関係

内的経験		国語	社会(※1)	数学	理科	英語
集団で取り組む	協調性やチームワークが養われたこと					△
	対人コミュニケーションが養われたこと	○				○
	集団で物事を進める基本的なスキルが身についたこと	△	△			△
セルフマネジメント	精神的なタフさ、精神力が養われたこと	△	△	○	△	○
	継続的に努力する習慣や態度が身についたこと	○	○	◎	○	◎
	失敗や困難な体験から学ぶことができたこと	△	△	○	○	○
	自分に自信が身についたこと	△	○	○	○	○
自分の考えをもつ	つまずいた時に自分なりのやり方で解決していく方法を身につけたこと	△	△	◎	○	○
	物事の本質をとらえる力が身についたこと	○	○	○	○	△
	既成の概念にとらわれず自分の頭で考えること	○	○	○	△	△
	社会に関心をもつこと	△	◎			○
	自分の意見をもつこと	◎	○	△	△	○

(※) 教科で得られた内的経験は、具体的にどの教科で得たかを聞いた結果。反応率が高かったところにマークを記入。◎が特に反応率が高かった箇所。
(※1) 社会は、地理歴史公民および倫理や政治経済。

引用元：辰巳哲子、2014、『キャリア発達を促す「基礎力」の獲得に高校での経験が果たしている機能』筑波大学大学院人間総合科学研究科修士論文(未公開)